

# 論文の和文要旨

論文題目

ジャワにおける共同体と儀礼

: 女性の役割と儀礼変化を中心に

氏名

塩谷もも

ジャワを対象とした先行研究では、東南アジア社会の特徴として提示された二者関係論、「ゆるやかな構造の社会」など集団の規定のゆるやかさに着目し、その点を強調する傾向にあった。ジャワの共同体に関する研究は、大きく分けて土地制度に注目し共同体の存在を指摘する立場と、二者関係論やネットワークの重要性に注目し共同体の存在を否定する立場のものがある。いずれの研究においても、地縁に基づくつながりを生み出すものとして、先行研究で注目されてきたものは儀礼である。

ジャワの儀礼に関する先行研究では、スラムタン儀礼に代表されるように、男性が参加する儀礼の場に注目があつまり、この場を中心とした分析が行われてきた。こうした先行研究に対し、本研究では、隣人を中心とした人々のつながりにどのような意味を持つかという点から儀礼をとらえ、ジャワにおける共同体を考察する対象として儀礼に着目する。なかでも、先行研究では重視されてこなかった、女性が担当する料理準備の場を中心とした記述・考察を行なう。

ジャワの儀礼は、イスラーム意識の高まり等の影響を受け、変化の過程にある。進行中の儀礼変化について、地縁に基づくつながりに注目しながら分析をすることで、隣人関係に及ぼす影響を考察する。さらに、こうした変化の中でジャワの共同性を支えているものは何であるかを明らかにしていく。

本論文は6つの章から成り、その内容と明らかになった点は以下のとおりである。

第1章では、論文の導入および背景説明として、調査地の住民構成、歴史、宗教、言葉の特徴を記述し、地縁に基づく人々のつながりを分析する背景として、住民組織とコミュニティ活動、モスクを主体とした活動を記述した。調査地のコミュニティ活動については、性別と既婚・未婚の区別によって参加する活動が決まっている。住民組織とモスクを主体とした活動は、いずれも参加するメンバーが重なっているが、住民組織が地域全般を対象とした幅広い活動を行うのに対し、モスクを主体とした活動は宗教に関わる活動のみを行う。活動内容に違いはあるが、どちらの活動もコミュニティ意識の形成・維持に結びついている。地域単位で行われる活動の内容は多様であるが、女性が参加しているものの方が、男性が参加しているものより活動が活発だという特徴がある。

第2章では、調査地において行われる年中行事（断食月後の大祭、サドラナン儀礼）の変化を対象として、地域におけるイスラーム意識の高まりと簡略化という2つの側面

から儀礼を分析した。インドネシアにおいてイスラーム意識は高まる傾向にあり、調査地でも、この傾向は顕著である。例えば、非イスラーム的とされる霊的存在への供物の慣行は行われなくなり、調査地でその対象となってきた霊的存在に関する話は、若い世代には伝えられていない。

調査地では、サウジアラビアに留学経験のある新住民の男性が主張する、非イスラーム的とされる要素を排除した「正しいイスラーム」の主張が影響力を持つようになってきている。年中行事もこれを受けて、非イスラーム的とされる要素を排除し、イスラーム的とされる要素を付け加えるという形で変化している。なかでも儀礼が行なわれる機会ごとに組み合わせの決まった料理は、供物としての意味を持つため、特に排除の対象となっている。

供物は組み合わせが複雑で、準備にも手間がかかるため、これなしで儀礼を行うことは、効率化にも通じている。しかしながら、こうした儀礼の変化について語る際、調査地の人々はイスラームに結び付けた説明をし、効率化に結び付けた説明はしない。

断食月の開始前にモスクを会場に行われる祖霊に祈りを捧げるサドラナン儀礼は、イスラームよりもむしろジャワの慣習と結びつくものである。しかし、儀礼の中の講話では、コーランやハディースに結びつけることで、この儀礼を行うことが正当化されている。また、以前は料理を囲んで祈りを捧げるスラムタン儀礼（現在では正しいイスラームに当てはまらないとされる）と類似した形式で行われていた。しかし、現在では祈りが終わってから料理が出される形式となり、正しいイスラームに当てはまらないとされる要素を排除するように変化している。儀礼は地域における結びつきに重要なものであるため、それを行わないという選択はせず、形式を調整し折り合いをつけることで続けられている。また、儀礼に参加する男性の数は減っても、儀礼の際に女性が料理を寄付することは続けるという形がとられている。

第3章では、人生儀礼（誕生、結婚、死）の変化を対象として、年中行事と同様に地域におけるイスラーム意識の高まりと簡略化という2つの側面から分析を行なった。誕生儀礼については、調査地で行われた14事例の比較、婚姻儀礼についてはある世帯での3姉妹の事例の比較、死後儀礼については2事例の比較をすることで、儀礼変化について考察した。

儀礼を行なう際、イスラームを強調するという傾向は、人生儀礼についても同様に見られる。例えば、誕生儀礼を行なう際にヤギを屠るアケコアンを行い、儀礼を行なう日も従来のジャワの暦に基づく日からイスラームに基づく日に変更する、婚姻儀礼を行なう際にジャワ式の儀礼的行為や供物を排除し、花嫁がムスリム用のベールをかぶる等の変化が進行中である。その一方で、事例の比較からは、イスラーム的とされる要素と非イスラーム的とされる要素が、混ざり合っており、人々が主張するほど実際に行われている儀礼の中でイスラーム化は進行していないことが明らかになる。

人生儀礼は世帯単位で行われるものであるため、家計を管理し、家庭の中で経済的な

権限も大きい女性による決定が影響力を持つ。調査地の女性たちは日常的に積極的に宗教講話会に参加するなど、イスラームとの結びつきが強い存在である。儀礼の形式決定については、儀礼の準備を担う女性による決定が影響力を持つことを指摘した。

第4章では、ジャワにおける相互扶助と隣人意識の形成・維持について論じた。ジャワにおいてコミュニティ活動は、男性が地域全体を対象とした活動を行なうのに対し、女性はコミュニティ内の世帯を対象とした活動を中心に行なう。なかでも、女性が行なうレワンと呼ばれる儀礼の際の手伝いは、コミュニティ内の世帯を対象とした相互扶助の中心的なものである。また、男性が参加するコミュニティ活動は、現金を提供することでそれに代えることもできるが、レワンは労働に対して労働で返すという原則があるため、現金を提供することでそれに代えることができない。

共同体の中心人物（男性）は、儀礼の際にスピーチや司会を担当する、祈りの先導を行うといった役割を果たす。日常的には、隣人を助けることで地域での評価を得ているが、それに加えて各世帯の女性の活動がその評価を支えている。儀礼とレワンいずれの場も言葉が重要な意味を持つが、儀礼の場の言葉はジャワ語の敬体が中心で、いかに正しく話すという形式が問題になるのに対し、レワンの場で交わされる言葉はジャワ語の常体が中心で、いかに人の関心を引けるかという内容が問題になるという特徴がある。レワンの場は日常の要素が強いため、社会関係に直接的に影響力を及ぼしうる。

第5章では、レワンの場の具体的な記述とその場を通じて維持される隣人関係についての分析を行なった。レワンの場では、担当する作業ごとにグループが形成されるが、これには地域における位置づけが反映されており、それに応じて行なう作業が異なる。儀礼への参加は招待に基づいてなされるが、レワンへの参加は参加者の判断に基づいてなされ、儀礼主催者世帯ごとに参加人数にも大きな違いがある。事例に基づいて儀礼ごとのレワンの参加者の比較を行い、どのような関係に基づいてレワンへの参加が行なわれているかを分析する。

レワンに参加する女性は、儀礼の主催者に労働力を提供するのと同時に現金やものを贈り、これは原則として等量交換の原則に基づくものである。贈与は世帯単位でなされており、その贈り手と受け手は原則として女性で、それを管理しているのもやはり女性である。儀礼の主催者はレワンの参加者をはじめ隣人に料理の贈与を行うが、同じ量になるという点に注意を払うなど平等性が強調されている。しかしながら、実際には料理は受け取り手に応じて差付けがなされる。この差付けには儀礼主催者側からの評価が反映されており、地域の社会関係に影響を及ぼす。男性が参加する儀礼の場では、平等性が強調されるが、レワンの場では日常に応じた差異がより明確にあらわれている。

第6章では、儀礼の際のケータリングの利用とケータリング業が一つのきっかけとなったもめごと事例を中心に論じる。調査地では新興住宅地を中心として、儀礼の際にケータリングを利用するという現象が起こっている。相互扶助に基づいて行われてきたレワンとは異なるケータリングの導入にもとからの住民の多くは否定的である。

ケータリング業が原因となった調査地のもめごとの事例から、二者関係論に代表されるように集団があいまいとされてきたジャワ社会において、地縁に基づく隣人意識が存在すること、この意識の形成・維持にはレワンをはじめとする相互扶助が影響力を持つことを明らかにした。また、レワンの場を中心として女性が行う噂話については、女性のみならず男性も含めた隣人間関係に影響を与えているという点も指摘した。

終章では、6章全体を通じて議論のまとめを行ない、イスラームの影響や都市化の影響等で様々な変化が生じながらも、ジャワにおける共同体の維持に料理が重要な役割を果たしている点は変化していないという結論を提示した。